

積丹町教育委員会が主催する「国際交流会in積丹」が11月16日(土)と17日(日)の2日間で行われ、北海道海外技術研修員や札幌近郊の大学に通う留学生などから成る国際色豊かな10か国12名が同町を訪れた。



ヒンズー語で上下左右を指示しながら「福笑い」に挑戦

1日目は教育委員会の方の案内により、観光名所である島武意海岸や神威岬を視察。いつもは強風に見舞われる両所だが、この日は天候に恵まれ、穏やかな陽光に包まれながら留学生は積丹の美しい景色に魅了されていた。

2日目は町内の小学校4校と中学校1校を、留学生12名がそれぞれ分かれて訪問。子どもたちは日本の昔遊びや町を紹介する発表などを準備し、一方、留学生も写真などを多く使った発表資料で言葉や文化について話したり、伝統衣装を披露するなど相互に学びあえる機会となっていた。

交流を終えた留学生は、「子どもたちが一生懸命歌っている姿に涙が出そうになった」、「子どもとの出会いで日常の不安や悩みが全部なくなった」、「これからも日本の学生に自国の文化を伝えていきたい!」とうれしそうに語っていた。

13回目の開催となるこの事業。子どもたちは留学生に会えるのを楽しみに、ゲームや活動を一生懸命考え、その気持ちが留学生一人一人に伝わっていた。相手のことを思いながら行動する最高の「おもてなし」を通して、子どもたちも留学生もそれぞれがかけがえのない時間を過ごしていた。

積丹町の観光名所・神威岬を見学する留学生



国際交流会 in 当別町立弁華別中学校



留学生のこのジェスチャーは…答えはサッカー!

札幌市内及び近郊に住む留学生3か国5名が、当別町にある弁華別中学校(全校生徒15名)を訪問し、様々なゲームやじゃがいも料理を作りながら交流会に参加した。

生徒代表による流暢な英語での歓迎の挨拶でスタートし、留学生がパソコンを使ってそれぞれのお国紹介をした。生徒たちの表情は最初少し固いように見えたが、ブラジル・パラグアイに関する〇×クイズから緊張がほぐれ始め、生徒が考えた「ジェスチャークイズ」では一番の盛り上がりを見せた。ゲームは全てグループ対抗戦で行われ、各グループが留学生と結束しながら、真剣勝負が繰り広げられていた。

その後も、同じグループで昼食作りへ。生徒たちが今年収穫したジャガイモを使ったポテトコロッケ、ポテトサラダや、お味噌汁やお餅のデザート、全員で調理。出来上がった大きすぎるコロッケに笑みを浮かべながら、教職員も含め参加者全員で交流を深めた。

留学生からは、「生徒が準備してくれたゲームがとても楽しく、元気をもらった」、「小さな学校で教師と生徒が仲良くしている姿がすごい」、「海外への好奇心が強く、将来が頼もしいと思った」などの感想が。

ゲームや調理交流を進めるうちに、生徒と留学生が自然と笑顔になっていき、交流が終わる頃にはお互いのことをさらに身近に感じて行ったのだろう。



みんなで力を合せてポテトサラダ作り

国際フェスタ in とかち 2014



モンゴルの遊びに挑戦。留学生に勝てるかな?

十勝地域で国際交流・協力を推進する団体が参加する「国際フェスタinとかち 2014」(主催:十勝インターナショナル協会、共催:JICA北海道(帯広)等)が、帯広市内のとかちプラザで2日間にわたり開催された。

初日は、JICA北海道(帯広)が、フェアトレードをテーマとした映画「おいしいコーヒーの真実」を上映。エチオピアの厳しい状況下でコーヒー生産をする人々と、カフェ等で優雅にコーヒーを楽しむ先進国の人々が対比される内容に、多くの人たちが関心を持ちながら鑑賞していた。

また、会場内では、国際姉妹都市交流や国際交流・協力をを行う団体の活動を紹介する展示の他に、留学生の出身国の遊びが体験できる「世界の遊びコーナー」や、国際交流にまつわるクイズに答えるスペシャルラリーなど、子どもたちも楽しく様々な国を知ることができる企画があった。

他にも、帯広畜産大学の留学生やJICA研修生等によるパネルディスカッションも行われた。「自分の国で一番有名な日本人は?」の質問に対して、アメリカは「イチロー」、アフガニスタンの留学生は「緒方貞子さん(前JICA理事長)」と回答し、それぞれの背景が見える回答に、会場から驚きや関心の反応が。

会場のいたるところに来場者の笑みが見られ、地域住民が身近に世界を感じられる貴重な機会となっていた。

であい



公益社団法人
北海道国際交流・協力総合センター
HIECC/ハイエック
Hokkaido International Exchange and Cooperation Center



不発弾処理センターにて
ラオスが抱える問題の現状を学ぶ

北海道国際交流・協力総合センター(HIECC)では、北海道教育大学の津副学長(北海道ユネスコ連絡協議会会長)による監修及び指導、また開発教育の実践者である開発教育ファシリテーターのご協力のもと、道内の高校生を対象に開発途上国へのスタディツアーを含む人材育成事業を平成22年度より実施。今年度は10名の高校生が2回の事前研修を経て8月に首都ビエンチャンを中心にラオスを訪問し、現地で開催するNGOや青年海外協力隊員の方との懇談、NGOが支援する子どもとの交流などを体験した。

ラオスで体験! 国際協力活動

札幌から4回も飛行機を乗り継いでやっとどり着いたラオスの首都・ビエンチャン。長旅を無事に終え一瞬安堵に包まれたが、ゆっくり休む時間などなく、期待と不安の両方の気持ちが入り混じりながらスタディツアーが始まった。

滞在中は様々な活動を体験。女性障がい者施設にお渡しできるよう、ラオス訪問前にNPO法人「飛んでけ!車いすの会」の指導を受けて高校生が2台の車いすを整備した。その到着を待ち侘びていた2人がうれしそうに車いすに乗ったとき、自分の荷物を減らしたり仲間と協力して車いすを運んだ努力が報われたと実感したに違いない。他にも、図書館活動をするNGOで翻訳シール貼りのお手伝いをしたり、ラオスの主食・もち米の田植えなども体験した。



おいしく育ててね!ラオスで田植えを体験

ラオスの子どもたちとの出会い

NGOが支援する子どもセンター(日本の児童会館のような施設)も2日間にわたり訪問。センターの子どもたちに楽しんでもらえるよう、事前研修で意見を出し合いゲームや遊びを用意した。しかし、いざ子どもたちを目の前にすると、「楽しんでくれるか」、「仲良くしてもらえるだろうか」と不安げな表情に。緊張しながらもゲームのルールを説明し交流を始めると、子どもたちが大きな声を出してはしゃぎ始め、いつの間にか会場にいる全員がゲームで大盛り上がり。緊張はどこかに吹き飛んでしまっていた。



子どもセンターにて みんなに出会えて良かった!

楽しい時間はあっという間に過ぎ、交流の最後にラオスの子どもたちから日本語の歌のプレゼントが。歌詞カードを目で追いながら、部屋の隅々まで行き渡るほどの声で一生懸命歌う姿に、高校生たちの目から次第に涙が溢れだし、合唱の輪の中に誘われ一緒に歌い始めると、双方の子どもたちが大粒の涙を流していた。

現地で感じ考えたことを伝える

帰国後、高校生は2グループに分かれ在籍する高校や母校などの道内中学校でラオスでの体験を報告した。何カ月もかけて仲間同士で話し合ってきた発表資料を準備し、当日は自分の目で見て感じたことを言葉に乗せて伝えた。発表中には、現地でのことを思いだし必死に涙をこらえながら話す場面もあり、聞いている側の高校生が涙することも。報告会後のアンケートには「同年代の人の話なので親近感を持って聞けた」、「不発弾で苦しむ子どもの話を聞いて想像しただけで涙が出そうになった」などの感想があった。



人前で話すのは少し緊張 札幌市内の中学校での報告会

高校生が現地で感じたラオスの人々の優しさや温かさが、この報告会を通して日本の中学生や高校生の心にも伝わっていった。

特集

「高校生が見たラオス」 平成25年度高校生・アジアの架け橋養成事業



公益社団法人
北海道国際交流・協力総合センター
HIECC/ハイエック

〒060-0003 札幌市中央区北3条西7丁目 道庁別館
発行日: 2014年3月10日
TEL. 011(221)7840 FAX. 011(221)7845 http://www.hiecc.or.jp
E-mail: intc@hiecc.or.jp(交流・協力部)
印刷: 岩橋印刷株式会社

インドネシア人と日本人が「楽しく」をモットーに交流

又サントラ札幌インドネシア文化交流会(NSI)
インドネシア人留学生 アナスタシア アマンド さん

NSI(Nusantara Sapporo Indonesia、又サントラ札幌インドネシア文化交流会)は2001年に設立し、日本に興味を持つ札幌に留学しているインドネシア人のボランティアと、インドネシアに関心のある日本人を対象にする会である。文化交流が主な目的であり、NSIは在日インドネシア留学生協会札幌(Indonesian Student Association of Sapporo)の協力の下で、様々な活動を行っている。

●インドネシア語教室(Kelas Bahasa Indonesia)

1ヶ月に2回実施。インドネシア出身の留学生からインドネシア語を教えてもらう。語学の他にインドネシアに関する文化や情報なども留学生から聞くことができる。教室はBクラスとCクラスに分かれて行っている。(Bクラス:中級～上級(インドネシア語で会話がほとんどできるレベル)、Cクラス:初級向け)



●料理教室(Kelas Masak)

1年に2回行われるイベント(1回目:2月か3月、2回目:9月か10月)。毎回、およそ30人の申込者が集まる。インドネシア料理を直接インドネシア人から学び、一緒に料理をし、最後に参加者全員で食事する。



●インドネシアの舞踊教室

インドネシアの踊りや歌を学ぶ教室。なお、在日インドネシア留学生協会北海道(Indonesian Student Association of Hokkaido)の年間行事であるインドネシア文化ナイト(インドネシアの文化祭)に参加することもある。

●忘年会

インドネシア料理およびインドネシアの文化踊りやパフォーマンスなどで一年を締め切るパーティーとして開催。

●奨学金の活動(Mari ke Sekolah)

インドネシアの教育を支援する奨学金の制度をNSIでも実施している。

又サントラ札幌インドネシア文化交流会(NSI)

■情報アクセス: <http://nusantara.cloud-line.com/> ■お問い合わせ: nsi.hokkaido@gmail.com

さっぽろ 研修員・留学生日記

右)瑞慶覧 ヴェロニカ 幸江 さん
ブラジル連邦共和国
北海道建築設計監理株式会社にて「建築設計」を研修



中央)嶋田 ブルーノ 静也 さん
ブラジル連邦共和国
北海道大学大学院商学研究院にて「貿易分野における日本とブラジルの経営理念の比較」を研究

右)水本 なつえ さん
パラグアイ共和国
宮島学園北海道ファッション専門学校にて「服飾技術」を研修

平成25年度ハイエック受入の北海道海外移住者子弟留学生の嶋田君は平成25年4月に、北海道海外技術研修員の瑞慶覧さんと水本さんは6月に来道、それぞれの専門の勉強をスタートし、3月に全てのプログラムを終える。

周りの人が背中を押してくれた

嶋田君はブラジルの大学で「経営学」を学んだが、卒業後の進路に迷いが。そんな時、祖父が「日本に留学してみよう」と。一度群馬に7か月間住んだ経験もあったが、自分のルーツである北海道を訪れたことはなく、思い切って応募し留学することになった。

瑞慶覧さんも茨城で約半年間生活したことがあったが、ブラジルの大学で聴いた日本人建築家による特別講義で、「もう一度日本に行きたい」と決意。ブラジルと違う風土や雪に憧れ祖母の出身である北海道で研修することになった。

4人姉妹の末っ子の水本さん。実は3人の姉のうち2人が北海道に研修や留学をしていたが、自分には関係ないと思っていた。しかし、パラグアイで利用している日系人経営の仕立屋の技術に感銘し、実はその人が日本で学んでいたことがわかった。「私もこの人のようにになりたい!」と決心し、研修を受けることになった。

日本に来て感じたこと、学んだこと

これまでの経験から3人が口を揃えて強調していたのは、

「忍耐とあきらめないこと」。

嶋田君は「経済史の奥深さを学べたことは大きい」と述べた。大学院では能動的な研究が求められるが、学ぶ度に自分の勉強不足を思い知らされた。しかし、諦めずに書籍を読み深めゼミでの発表などを経験するうちに、「物事の捉え方や勉強方法が変わった」と実感したそう。

「会社の人はとってもしっかりと、困ったことはありません」と瑞慶覧さん。研修で習得した「パース」(建物の外観などを遠近法により描いた完成予想図)の技術は「ブラジルに帰ってからぜひ活用したい」と。今は、保育園をテーマにした卒業設計に奮闘中だ。

「無駄だと思っていた作業が大事と気付いた」と述べるのは水本さん。パラグアイではすぐに本生地に切り掛かってしまうが、日本では何度もシーチングで仮縫製することに驚いた。しかし、「何度もやり直すことでより完成度が高くなるし、今はその作業の重要性が身に染みてわかった」と語っていた。

各自が専門の勉強に挑む中、うまく進まない時期や涙を流したこともあったそう。そんな時は、北海道の景色や食べ物に癒されたり、仲間と励まし合うことで乗り越えることができた。自信に満ちた今の3人の笑顔は、これまでの努力の結果なのだと感じた。

北海道外国訪問団受入事業

アルゼンチン共和国から6名の青年交流団

今年度で18回目となる「北海道外国訪問団受入事業」は、アルゼンチン共和国から、在亜北海道人会ミシオネス支部長の太田正雄団長をはじめ、ブエノスアイレス州やミシオネス州から6名の青年交流団を迎え、1月30日(木)から2月6日(木)までの8日間の日程で実施、本道関係者との交歓・交流を通じて相互理解を深め、本道とアルゼンチンとの一層の親善交流に寄与した。

日中の最高気温が40度以上になる真夏のアルゼンチンから来道した団員は、季節が逆転した白銀の世界に驚きつつも、北海道の歴史や生活・文化について積極的に見聞し、北海道の歴史、産業、文化施設などの視察や親類等でのホームステイを通して、父祖の地・北海道への理解と認識を深めた。

札幌市内を中心とした視察では、北海道開拓の村、大倉山ジャンプ競技場、札幌ドーム、北海道新聞社の印刷工場等を見学。サッカーの盛なお国柄、特に札幌ドームでは、日本の技術力の高さを目の当たりにして感嘆の声が飛び交い、母国の施設との違いを比べながら、真剣に話している様子が印象的だった。

また、学校法人八紘学園北海道農業専門学校の訪問では、北海道の基幹産業である農業の教育機関の現場と移住当時の農業の姿を知るきっかけとなったばかりでなく、南米圏諸国への造詣が深い福島理事長みずからが、アルゼンチン訪問時の想い出話をお話し下さるなど、貴重な一時となった。

団員一行は、「北海道・アルゼンチン共和国」両地域の今後一層の交流拡大への思いを新たにして帰国の途についた。



北海道で「吹雪」を初体験。厳しい寒さにも満面の笑み

ロシア料理講習会

(11月7日 木曜日 旭川市永山)

ロシア人女性のオーリガさんを講師に迎え、旭川市永山公民館で市民約20名が参加し、ロシア料理講習会が開催された。(主催:日ロ文化交流協会「リャビーナの会」、共催:(公社)北海道国際交流・協力総合センター、永山公民館)

調理前に、講師のオーリガさんが講習会で作る各料理の成り立ちや、またロシア料理の歴史などを簡単に説明。ロシア料理は、もともとベチカを使って調理していたので、「焼く」「茹でる」という調理法が主で、「揚げる」という方法は本来あまり用いられず、またフランス料理の影響を強く受けているとのこと。オーリガさんは日本に来てから10年以上経ち、ロシア文化を日本人に伝える立場になってロシア料理の良さを知ることが出来たと語っていた。



スベコールニク(ボルシチの一種)とワレニキ

講師の簡単な講話を聞いてから、4グループに分かれて調理開始。赤ピーツなど普段あまり目にする事ない食材を手にした参加者たちは、オーリガさんの的確な指示に従いテキパキと作業を進めた。ボルシチ、ワレニキ(水餃子風デザート)作り、オリヴィエ(冬野菜を使ったサラダ)を3つのメニューを、それぞれが役割を確認しながら調理し、4グループとも目標時間内に無事完成することができた。

最後は、各グループが自分たちの作った料理を囲んで試食。リャビーナの会の事務局の方が、ロシアからのお客様にいただいた本場の「黒パン」と共に食事。参加者たちは自分たちで調理したロシア料理をおいしそうに頬張りながら、「作る」「食べる」ことを通してロシアを身近に感じながら、秋のひと時を過ごしていた。



講師のオーリガさん



美味しいロシア料理を目指してみんなで協力